

二〇二四年度入学試験問題

B

国語

(一〇〇点 六〇分)

《注意事項》

- 一、試験開始の合図があるまで問題冊子を開いてはならない。
- 二、この問題冊子は全部で15ページである。落丁、乱丁、印刷不鮮明の箇所などがあつた場合申し出ること。
- 三、解答には黒鉛筆又はシャープペンを用い、色鉛筆、万年筆などを使用してはならない。
- 四、解答用紙は1枚(表と裏)である。
座席番号(数字)、氏名を解答用紙の指定欄に記入すること。
- 五、この問題冊子の余白は、自由に利用してよい。
- 六、試験終了後、この問題冊子は持ち帰ること。

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(なお、出題の都合上、文章の一部や図、小見出しを省略するなどの改変を施している。)

二一世紀の中葉に向かって、人の移動はどのようなのだろうか。COVID-19の世界的蔓延を契機として、リモートワークや遠隔コミュニケーションが加速し、人々は移動しなくても充実した活動を維持できることがわかった。ここから、人の移動は減少傾向に向かうと推測する人々もいる。確かに、コロナ禍は、文明の曲がり角を示す大きな句読点だったかもしれない。増えすぎた人口や、破壊が進んだ環境に対して、恒常性の維持や浄化機能のようなものが地球・自然の摂理として備わっているなら、行きすぎた人為に対して反動があつてしかるべきであり、新型ウイルスも異常気象もひとつながりの現象かもしれない。

しかしながら、移動について言うなら、それが可能な状況になると、人々は徐々に動きを取り戻し、さらにその動きを加速していくように思われる。なぜなら (1) 文明史的な観点で、世界は「遊動の時代」に入ったからである。

「遊動」の対義語は「定住」である。農耕の発達以来、田畑とともに生きる安定した暮らしのかたちであった定住が、通信技術と移動手段の共進化によって揺らぎ始めているのだ。リモートワークや遠隔コミュニケーションの成熟は、家にいながら仕事ができるというより、どこにいても仕事ができる・繋がる、という状況を生み出したと考えた方がいい。

この半世紀の間、国境を越えて移動する旅行者の数はうなぎ登りに増えてきた。一九六四年、つまり最初の東京五輪の頃、国境を越えて移動する人の数は約一・二億人。そのほとんどは欧米人だったと推測される。しかしながら二〇一九年の時点ではほぼ一二倍の約一四億六〇〇〇万人が国境を越えて移動している。日本人も、アラブ人も、中国人も、盛んに移動するようになった。この傾向は今後ますます加速していくと予想され、二〇三〇年には約一八億から二〇億の人が国際的に移動すると言われている。このような遊動性が、全く新しい世界の「常態」を生み出していきそうだ。

世界はグローバルに連携し始めて久しい。情報も、資源も、資金も、人も、製品も、国境を越えて流通している。一方で、世界がグローバルになればなるほど、文化的な特異性、すなわちローカルの価値が高まっていく。その土地の固有性や文化・

伝統の独自性が、世界の文脈の中で輝きを強めていくのである。世界は、混ぜ合わされて均質化しグレーになっていくのではない。個別文化の固有性が、鮮明に煌めいてこそ、世界は豊かなのだということを人々は理解している。イタリア料理は地中海で、日本料理は日本列島の風土で味わうことが至上であり、タイではタイの美意識にあった建築や衣服が、インドネシアではインド太平洋に広がる数多の島々の気候に即したヴィラや音楽が輝きを放つ。人々はグローバルに移動し、地球、環境、文明の素晴らしさを、ひとつひとつの土地で味わう。(2)

「グローバル／ローカル」は対義語ではなく、一対の概念として新たな価値を生み出し始めているのだ。

日本へのインバウンド（外国人旅行者）の伸びは、その変化を ① 如実に反映している。二〇〇九年の訪日旅行者の数はわずかに六八〇万人であった。それが二〇一九年には約三二〇〇万人に達していた。わずか一〇年間で実に四・七倍。

この間、スペイン、イタリア、フランスなどの観光大国もじわじわとインバウンドの数を伸ばしている。スペインは五五〇〇万人から八五〇〇万人に、イタリアは四五〇〇万人から六五〇〇万人に、フランスは七八〇〇万人から九〇〇〇万人へと伸ばした。いずれも概数だが、自国の人口を超える数の来訪者を受け入れていることになる。観光は二流の産業で花形は製造業と (a) 高をくくっていた日本であるが、今後の見通しとして二〇三〇年には六〇〇〇万人の旅行者の来訪が予測される状況においては、国の産業ビジョンを見直すことが ② キッキンの課題であることは明らかである。

ためしに、インバウンドの効果を売上高で示してみるとわかりやすい。三二〇〇万人に達した二〇一九年の訪日外国人の消費額、つまりインバウンドの売上高は約五兆円。自動車の輸出額は約一二兆円、半導体等の電子部品の輸出額が約四兆円であるから、インバウンド消費の規模の大きさが理解できる。二〇三〇年のインバウンドが六〇〇〇万人と予測され、その売上高は政府の目標値として一五兆円が見込まれている。日本の産業の趨勢を考慮する上では見逃せない数字である。

製造業的産業観から脱却できない日本の産業は、この状況をうすうす分かつつも、これを (b) 看過しているように思われる。なぜなら、「精密なシステムや製造の仕組みを管理していく仕事」は得意でも、「価値を見立てていく仕事」のために必要となる、投資と回収の仕組み、美や味、品位や風格、心地よさなどといった感覚知を的確に制御していく人材や事業運営のノウハウが、蓄積されてこなかったからである。よくできたホテルを見て、丸ごとそれを買収するような動きはあつて

も、ゼロからそれを組み立てることはしてこなかった。だからある意味、手をこまねいていたというよりも、手が出せないでいたと言った方が正確かもしれない。日本にも、格式のあるホテルや、伝統あるリゾートホテルはある。しかし、日本のホテルはその誕生に遡れば分かる通り「西洋文化を咀嚼する」という方向で立ち上がってきた経緯があり、日本流をもって訪日客をもてなすようには仕立てられていなかった。

したがって、むしろ外国資本、たとえばシンガポール、香港、米国あたりの、美や価値の差配に覚えのある企業が、日本の観光の潜在力に着目し、日本への投資を着々と進めていたわけである。そんな状況を考えるなら、コロナ禍は、むしろしかるべき準備にとりかかる ③ ユウヨを得たという意味で、日本にとっては好都合であった。 (3) 曲がるべき角が見えているなら、遅きに失するということはない。しっかりと足元を踏みしめて曲がればいいのである。

一方でもちろん、データや数値予測だけを頼りに、インバウンドに経済効果を期待するのは短慮に過ぎる。オーバーツーリズムが指摘されて久しい京都をはじめとする既存の観光地は、イナゴの大群のように押し寄せる観光客によって、居心地の悪い場所になりかけていた。日本に限らず、ヴェネチアにしても、バルセロナにしても、多くの来訪者によって消費されてしまいそうな場所は多々指摘されていた。したがって、これまで世界の人々が「観光」ととらえてきた発想から離れて、できることなら、風土や文化、そしてサービスを評価し堪能できる人々に、より少なく来訪してもらって、同様の経済効果を生み出す道筋を探らなくてはならない。高い対価を払ってでも、その場に行き、その空気を吸い、建築やサービスを享受したいと、世界の目利きたちに一目置かれる場所になる必要がある。この点は ④ 肝に銘じておきたい。

一般的に観光資源と言えば、「気候、風土、文化、食」をいう。そのいずれにおいても日本は非常に高い潜在力を持っている。

ユーラシア大陸の東の端に位置する海に浮かんだ東西、南北に連なる列島で、その地勢を反映して四季は変化に富んでいる。火山列島であるから、国土の大半は山で、その六七パーセントは森林で覆われている。山から海へと無数の川が、へちまの筋のような密度で流れ出しており、良質な水源が豊富にある。また、火山列島であるため、いたるところに温泉が湧き出している。

千数百年にわたって、ひとつの国であり続けた文化的蓄積も膨大である。いかにも古そうに見えるフランスも、仮に五世紀のフランク王国あたりをその始まりと数えるなら、日本の飛鳥・白鳳・奈良時代ということになるのか。日本の歴史の深度も相当なものである。

現代美術家の杉本博司は「未来素材は古材である」と自説を説きつつ、石や木の古材、たとえば天平時代の寺院の礎石とおぼしき石や、由緒ある神社や蔵の遺構としての木片、使用されなくなった水車の廃材などを収集・保管し、新たな建築素材として活用する「新素材研究所」を立ち上げて活動領域を建築方面へと広げている。その着想は、空間を構成する素材の希少性や価値を、**A**の中に見出す姿勢から生まれている。価値を生み出す背景の作り方として示唆に富む事例である。世界の人々に「欲しい」と言わせる価値の作り方については、その最前線で活動している現代美術家に学ぶところは少ない。

食については、季節ごとにその地に産するものを、旬を大事に考えて調理する文化が、料亭やレストランのみならず家庭料理の中にも受け継がれており、味付けもカツオや昆布の出汁、つまり「うまみ」という独特の風味を基調として工夫されてきた。今日、西洋のガストロノミー^(注)に対峙する味覚世界として世界中の感度のいい料理人たちはこぞって「うまみ」に注目している。

まさに可能性に満ちた、^⑤累々たる観光資源であるが、現在に至るまで国を成り立たせる資源として本気で考えられたことはなかった。一部の例外を除いて、日本国内の人々が「生産」にいそしんだ心身の疲れを癒し、宴会で羽を伸ばすための逸楽や歓楽を提供する産業として、温泉街や観光旅館がそこそこ栄えたにすぎなかった。そのような観光を決して否定も軽視もするつもりはないが、発想の異なる観光というものがある。未来の日本列島においては「気候、風土、文化、食」を基軸に、新次元の観光が開花しようとしているのである。

「フジヤマ・ゲイシャ」とは、日本人自身による日本紹介の浅薄さを^(C)揶揄する言葉であり、法被^{はっぴ}を着て、提灯をぶら下げ、和太鼓を激しく打ちならすパフォーマンスを繰り広げつつ、寿司や天ぷらを食べさせ、折り紙を披露するとか、緋毛氈^{せん}を敷いて赤い和傘をさしかけ、その下で抹茶を供するなど……、いずれも和の伝統に立脚したものであるが、紋切り型

の⑥ ラレッツには感受するべき奥行きがない。富士山はあらためて見直しても立派な日本のシンボルであるし、芸者も素晴らしい民衆文化であり、寿司も日本が誇る食の華である。しかし「フジヤマ・ゲイシャ・スシ・オリガミ……」と連なると、やや印象が変わってくる。個別文化の典型を連ねて、エキゾチシズムで異国の人々の目を引こうとするのは、自らの文化のたたき売りのようなものである。これは、たたき売りをする側も承知のことだと思うが、ポスト工業化社会に移行しつつある世界の中では、そろそろこの愚行のマイナス面に気づかなくてはならない。

日本文化は世界のいずれの文化と比較しても、実に独特であり、その本質は簡単には理解されない。理解にたどり着くには少し時間がかかる。しかし、それでいいのである。初見の「ちよんまげ」で驚かせるのではなく、少し時間が経ったのちにやってくる「分かる衝撃」こそ、より深く強い興味を喚起する引き金なのだ。

情報過多と言われる今日、人々は何に対しても、「知ってる、知ってる」と言う。英語で言うと「I know - I know -」。ウイルスについても、ヨガについても、ガラパゴス諸島についても……。なぜか「知ってる、知ってる」と二回言う。しかし何をどれだけ知っているのか。情報の断片に触れただけで知っているつもりになっているように見える。だから今日、効果的なコミュニケーションは、情報を与えることではなく、「いかに知らないかを分からせる」ことである。(4) 既知の領域から未知の領域へと対象を引き出すこと。これができれば人々の興味は自ずと呼び起こされてくるのである。

政治も経済も、考えられる限りの知恵を絞って、この島国の趨勢すうせうを切り盛りしてきたことには、それなりに納得がいく。しかしながら、そろそろ、僕らは未来の日本を運営するためのリアルな資源を視野に捉えていかななくてはならない。

〈原研哉『低空飛行——この国のかたちへ』に拠る〉

注 食い道楽。美食学。

問一 二重傍線部①～⑥について、カタカナを漢字に改め、漢字はその読みをひらがなで答えなさい。

問二 傍線部 (a) ～ (c) の言葉の意味として適切なものを、次の中からそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

(a) 高をくくっていた

ア 大したことはないと見くびっていた イ 高く見積もっていた ウ 覚悟を決めていた

エ 大事なことを忘れていた

(b) 看過している

ア 過去のこととしている イ 減多にないと判断している ウ 外せない良い機会としている

エ そのままにしている

(c) 揶揄する

ア あしらう イ からかう ウ 認める エ 憤る

問三 傍線部 (1) について、「世界は「遊動の時代」に入った」とはどのような状況のことか。その説明として適切なものを、次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア COVID-19の世界的蔓延に伴い、ここから人の移動が減少方向に向かうべきだという論調が増えている状況

イ 遠隔コミュニケーションの発達で移動しなくても充実した活動を維持できることが分かったという状況

ウ 増えすぎた人口や環境破壊に対して、地球の持つ恒常性の維持機能や浄化機能が働き始めたという状況

エ 田畑とともに生きる定住が通信技術と移動手段の共進化により揺らぎ始めているという状況

オ この半世紀の間、国境を越えて移動する旅行者がうなぎ登りに増え、今後とも増えると予想されている状況

問四 傍線部(2)について、「グローバル／ローカル」は対義語ではなく、一対の概念として新たな価値を生み出し始めているのだ」とはどのようなことを六〇字以内(句読点を含む)で説明しなさい。

問五 傍線部(3)について、「足元を踏みしめて曲がる」とはどのような状況からどのような状況へと変化することか説明しなさい。解答の際、①にあてはまる表現を本文中より七文字で抜き出し、②にあてはまる内容を本文を踏まえて四〇字以内(句読点を含む)で書きなさい。

①を重視する状況から②を重視する状況へ

問六 空欄Aにあてはまる内容として適切なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 歴史や時間の堆積
- イ 空間や資源の拡張
- ウ 未来や新素材の展開
- エ 権威や貨幣価値の累積
- オ 外国や地方の独自性

問七 傍線部(4)「既知の領域から未知の領域へと対象を引き出すこと」とはどのようなことか。五〇字以内(句読点を含む)で具体的に説明しなさい。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(なお、出題の都合上、文章の一部や小見出しを省略するなどの改変を施している。)

(1) 二〇一〇年代以降、急成長していったAIの技能が最も有効に働くのは、医療や農業、金融や犯罪捜査、自動運転などの分野です。これらの分野は、一見、まったくばらばらに見えますが、AIの視点から眺めるときわめて似ているのです。たとえば、医療分野では、CTやMRIの画像、あるいは内視鏡検査の画像から瞬時に早期がんの病変やクモ膜下出血の原因となる脳内の動脈瘤を発見することができるようになります。AIは、これらの疾患に関する過去の数十万枚の画像を学習し、そのパターン認識力を高めることによって、わずかな徴候からでも病気を発見できるようになってきたのです。この病変発見力だけに関して言えば、AIはすでに超一流の名医の眼だと言えるでしょう。また、同じように過去の症例についての膨大なデータから、ある患者に臓器移植をしたときの生存率の予測もある程度までできるようになっています。さらに、アップルウォッチのような身体装着型の装置で生体についての毎日のデータを集め、異変があれば膨大なデータの中で当てはまるものを見つけ出して最も適切な治療法を提案することもできます。

実は、このようなAIの医療分野での活躍と、農業分野での今後の活躍はほぼ同じ現象です。農業では今、省力化や生産性の向上にロボットやドローン、AIなどの先端技術を使う動きが広がっています。たとえば、果樹園で生い茂る葉で見えない樹木の枝ぶりをAIで正確に把握し、誰でも最善の剪定ができるようにする。あるいは、ベルトコンベアーで流れてくる農産物を画像センサーで即座にチェックし、AIが出来の悪いものだけを選別していくといった技術が登場しています。また、畜産ではすでにAI導入が進んでいて、乳牛の首には一頭ごとに歩数や動きの変化を測るセンサーが取り付けられ、病気の徴候をAIが常時監視しているそうです。畜産農家は、毎日牛舎を廻って牛の様子を観察するのではなく、自宅で牛の健康管理ができるようになってきている。つまり、人間の健康管理も牛の健康管理も基本は同じで、私たちがアップルウォッチを装着するのと同じことが、家畜の世界にも起きているのです。人間が、それほどまでに家畜化しつつあるとも言えましょう。

医療や農業以上にAI導入が業務に劇的な変化をもたらしているのが金融・証券分野です。金融業界ではこの数年、融資審査や資産運用、不正監視へのAI導入が進んでいます。証券業では、過去の膨大な注文データと人の目による審査結果をAIに学習させ、不正のあらゆるパターンを覚えさせます。それで、AIは取引から疑わしいものを抽出するのです。

銀行業界でも融資審査へのAI利用は広まりつつあり、融資を希望する人について年齢や収入、資産、職業といった情報だけでなく、生活習慣や消費パターン、出身校や趣味など多数の細かな情報が集められ、過去の膨大なデータに基づいてAIが希望者の格付けをしていく方向に向かっています。中国では、携帯電話のアプリによって、この種の格付けをスコアの形で誰でも簡単に受けられるようになっていて、スコアが高いとホテル宿泊や自転車の共有サービスで保証金がいらず、飲食店でも割引が受けられるそうです。中国政府はこれを住民の信用評価システムにまで発展させようと、納税状況やボランティア参加、犯罪歴などの個人情報と経済的な情報を一体化させ、住民一人ひとりの評価システムにしつつあるようです。こうしてAIは、かつてない徹底したAIの有力なインフラとなります。

当然、犯罪捜査や不特定多数の監視といった警察的分野でも、AIは活躍しています。最近、日本のパスポートを持つ人は、空港での出入国が機械処理になり、劇的に短縮化されました。顔認証や指紋認証の技術が劇的に高度化した結果ですが、そのカメラの向こうではAIが作動し、私たちについての様々な監視の仕組みが動いているはずです。街中に設置される無数の監視カメラに撮影された映像は膨大で、どんなに手慣れた捜査官でもそこから逃走した犯人の姿を見つけるのは困難でしょうが、AIならば膨大な画像データから、人間よりもはるかに速く、正確に犯人を特定します。実際、この種の活用はすでかなりの広がりを見せていて、ロサンゼルスでは過去一〇年に起きた事件の内容や日時、周辺のバーの数、パトカーの滞在時間などの膨大なデータをAIが処理し、犯罪多発スポットを一五〇メートルごとに詳細に示して市警に提供しています。中国では、駅前やコンサート会場など至るところで監視カメラが一人ひとりの顔認証をし続けていて、犯罪歴のある人や問題のありそうな人をいつでも逮捕できる状態になっているといえます。現代社会は、すでにジョージ・オーウェルの『1984』以上の監視社会を実現させてしまっているのです。

AIのこうした卓越した監視能力には、軍事的な利用価値が大いにあります。将来、SFもどきの眼鏡をはめた特殊警察

が群集の中にひそみ、危険人物を顔認証で特定し、誰にも気づかれずに殺傷するのが日常^② 茶飯事^③となるかもしれません。実際、二〇二〇年一月、トランプ米大統領の指令によって米軍はイラン精鋭部隊のガセム・ソレイマニ司令官を上空からの空爆で殺害しました。この国家的殺人が人々を^③センリツさせたのは、ドローンと人工^④エイセイ、そしてAIを組み合わせた今日の軍事技術の精度の高さでした。司令官はこの時、バクダッドの国際空港におり、彼らの乗る車二台だけが上空から爆破されたのです。同様のドローンによる空爆を、イスラエルは敵の重要人物の殺害に使っていると言われています。

AIやドローンの能力はますます高度化していきますから、将来的には自律型致死兵器、すなわちAIが膨大なデータに瞬時に反応し、自らの判断で標的を定め、敵をきわめて高い確度で殺害していく兵器の開発が進められる可能性があります。もはや、人間のぎりぎりの生死に人間が介在できなくなるのです。それでもこの殺人AIは、人間のような仕方では何らかの決断をしているわけではなく、膨大なデータを自動処理しているにすぎません。データの処理によって、人間の生命が瞬時に「処理」されてしまう未来が見えてきています。

しかも、⁽²⁾このようなAIデイストピアは、自動運転でどこへでも気楽に移動できるスマートシティのAIユートピアと表裏です。自動運転も自動殺傷も、膨大なデータに基づいて瞬時に問題のある対象を発見し、それに対処するAIの能力が基礎だからです。実際、自動運転はAIの力が最も身近に発揮される分野とされ、すでに実用段階に入っています。高速道路とコミュニティという、高速と低速の二つの異なるレベルでの道路網ではもう一定の安全性が確認されており、今はいかに技術を製品化し、利益を上げていくかというマーケティングの段階です。技術的な課題が残されているのは中間の、速い車もいれば遅い車もいて、繁華街もあれば人通りの少ない道もある都心的な空間ですが、ここは本来、個人単位の自動車よりも、路面電車やバス、自転車道や遊歩道といった公共的な交通インフラを整えて脱クルマ社会を実現していくべき領域です。いずれにせよ、自動運転についての技術が高度化していけば、それは自動殺傷の技術の高度化にますます道を開いていくこととなります。一方では徹底した安全性、他方では徹底した殺戮^⑤が機械によって誘導されていくのです。

これらすべて、すなわち医療から農業、金融、犯罪捜査、さらにはマーケティングまでを含めたすべてのAI活用には顕

著な共通性があります。つまり、それらはいずれも膨大な数の類似の要素、つまりそれは体内の細胞であったり、畑の植物であったり、金融上の顧客情報や投資先の情報であったり、つかみどころのない無数の群集であったり、そしてさらに数の多い全世界の消費者であったりするのですが、そのようなとてつもない数の母集団から、一定の条件の組み合わせに適合する相対的に少数の要素を選び出します。同時にこの抽出プロセスは、過去のとてつもなく膨大なデータに基づいていますから、それらの条件の組み合わせに適合する要素が、これからどんな変化をしていくか、将来の変化や行動についてのかなり確度の高い予測を含んでいるのです。医師や農業経営者、金融資本家や犯罪捜査官、それに広告企業のマーケティングは、そうしてターゲットとして特定された細胞や苗、投資先や疑わしい人物、さらには顧客の未来を高い確率で予測できてしまうでしょう。

a、AIが二〇一〇年代以降、全世界を巻き込むブームとなっていたのは、それがある程度まで未来を予測できるからです。コンピュータの情報処理能力の劇的な向上とネット空間や様々な専門的な現場におけるデジタルデータの莫大な集積により、AIは当該の領域のとてつもない規模のデータから、多種多様な変数間の相関について共通するパターンやそこからの変異を解析できるようになりました。そこからある一定の傾向性を、非常に精度の高い仕方で抽出し、特定事例に当てはめることができるようになったのです。そしてこの傾向性は、過去から現在についてばかりでなく、現在から未来についてもかなりの場合、当てはまります。**b**、DNAの変化が細胞に及ぼす影響についての傾向性が抽出されると、なぜそのような影響が生じるかがわからなくても、DNAのある変化で将来、細胞に何が起きるかを予測できるようになります。膨大な専門的文書の分析から、どのような場合にミスが発生するかを解析すれば、なぜそのようなミスが発生するのかはわからなくても、AIは文書作成者にどこを注意したらいいかアドバイスできるのである。

これはどんな産業にとっても、大いに有益です。AIの助けにより、私たちは未来を「間違いない」仕方でも予測できるようになるので、その予測を確実にするように行動したり、そこでの予測を回避するように行動したりすることができます。またその予測に基づいて新しい製品を開発し、他社を出し抜くことだってできるかもしれません。実際、AI技術の最初の応用は、もともと予測がビジネスの要であったような領域で進みました。すでにお話ししたように、金融分野での投資判断

のための信用調査や不正検出、あるいは保険や医療の分野です。その延長上で、犯罪捜査や軍事、あるいは自動運転、そして自動 ^⑤ ホンヤクといった相手のいる世界で、相互関係をフィードバック的に予測していく方向に進みました。

ここで重要なことは、⁽³⁾ AIは大量なデータさえあれば、変数間の複雑な共起的関係を見事に浮かび上がらせますが、因果関係を構造的に理解しているわけではないことです。AIは、とてつもない量のデータに潜んでいる指標間の複雑な相関を見つけ出すことについては天才的ですが、そのような相関がなぜ存在するのかを深く考えようとはしません。

AIの未来予測能力は、「プロファイリング」と呼ばれる情報集約技術によって大いに高められます。それは、多数のデータベースに集積されたある個人についての情報を、AIが相互に結びつけ、その統合化されたデータ群について評価を下していく技術です。ネット社会の中で私たちは様々なサイトにアクセスし、SNSで発信し、メールをやり取りしながら生活しています。つまり、私たちはばらばらな情報空間に日々膨大な痕跡を分散的に残しているのです。これらは普通、個別に存在するので、異なる発言や活動歴が結びつけられることはありません。 **C**、高度なプロファイリング技術はそうした痕跡をつなぎます。SNSのアカウント名が仮名でも、複数のサイトにまたがっていても、リンク先やプロフィールに使っている画像などから同一人物のものとして特定していくことができます。こうしてある人物の経歴や趣味、行動歴がまとめ上げられたプロフィールが作られます。

こうしたAIの予測技術が、重大な問題を含むことを明快に指摘したのは、『あなたを支配し、社会を破壊する、AI：ビッグデータの罠』（インターシフト、二〇一八年）という長いタイトルの本を書いたキャシー・オニールです。この本でオニールは、AIによる人材評価が、不平等を拡大再生産させる自己 ^⑥ 成就的な仕組みになっていることを説得的に示しています。

d、すでに述べた全米各地の都市で警察が利用している区域ごとの犯罪多発スポットの可視化システムですが、入力データに人種や民族に関するデータがまったく含まれていなかったとしても、結果的に人種差別を助長する傾向を強めます。なぜならば、多発スポットにはそれだけ多くの警官が配置され、彼らは自分たちの成績を上げるためや、諸々の理由で軽犯罪まで含めた多くの犯罪を摘発しがちです。そのため、より監視の目が行き届く地域でより多くの犯罪が摘発され、結

果的に、その区域がますます犯罪多発スポットとして記録されていくことになるのです。そしてこれは、しばしば黒人居住区と重なります。

雇用の場面でのAIによる人材評価では、この負の循環が深刻です。近年、従業員の採用にAIが導き出したスコアを利用する企業が増えてきました。問題は、そのスコアの算出モデルは、過去の膨大なデータから導き出されているために、必ずしも論理的に必然ではない多くの因子を合体させていることです。たとえば、請求書の支払いを滞納したことがないことと、遅刻をせずに出勤し、真面目に働くことの間には一定の相関があるかもしれませんが、過去に何らかの理由で滞納をしていても、仕事に対する強い責任感を持つ人はいくらでもいます。しかし、こうした諸因子の結びつきのなかで、その人のスコアが低くなり、職を得られず無職の状態が続けば、貧しさからますます悪い条件が重なっていきます。すると、ますますスコアが低くなり、就職はますます困難になっていってしまうのです。

お話ししてきたように、AIの思考は、私たちの通常の思考とは異なり、巨大なデータ群の中に人間の眼では見えない隠れたパターンを見つけ出していくことに基づいています。このパターン発見能力においてAIは天才ですが、それ以上でも以下でもありません。それは、私たちがするような論理的思考をしていないのです。ですから、このシステムの結果を社会的な価値に照らして評価するには、その入出力から検証を進めるしかありません。オニールは、AIの問題点を是正するために、その影響範囲や影響の大きさを測定し、アルゴリズムの監査を行う必要があると提案しています。

〈吉見俊哉『知的創造の条件』に拠る〉

問一 二重傍線部①～⑥について、カタカナを漢字に改め、漢字はその読みをひらがなで答えなさい。

問二 a d に入る言葉として適切なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア しかし イ つまり ウ たとえば エ ですから

問三 傍線部(1)について、「医療や農業、金融や犯罪捜査、自動運転などの分野」で病気を発見したり未来を高い確率で予測できたりするなど「AIの技能が最も有効に働く」のはAIにどのような能力があるからか。五十五字以内(句読点を含む)で説明しなさい。

問四 空欄Aにあてはまる言葉を本文中より漢字四文字で抜き出しなさい。

問五 傍線部(2)と同様にAIの持つ対照的な能力を表現している一文を四十字以内で抜き出し、その最初の五文字を書きなさい。

問六 傍線部(3)について、AIは「因果関係を構造的に理解しているわけではない」を言い換えている部分を本文中より二つ、それぞれ二十四字、十一字で抜き出しなさい。

問七 次の選択肢について、本文の内容と合致する場合には○を、合致しない場合には×を付けなさい。

ア 医療や農業、犯罪捜査においてAIが活躍している最大の理由は、人間の眼では見えない隠れたものをみることができる精巧なレンズが開発されたことである。

イ AIは過去の膨大なデータの中から論理的に必然ではない因子を合体させてしまうため、不平等を拡大し損失をもたらす可能性がある。

ウ AIがまとめるプロファイルは常に因果関係が明示的にまとめられているが、人間の思い込みによって十分に活用されないままになっている。

エ AIの監視能力は医療分野や警察的分野で活用される一方で、人間の生死に人間が介在できなくなる危険性も併せ

持っている。

オ 技術開発が進めばAIがすべての人間にとって不平等のない思考ができるようになるため、的確な未来予測が可能になる。